中國詩文論叢　第十五集

杜牧文學の自己評價と後世の評價

――詩と文、および「豪」と「艶」を中心に――

許山秀樹

一　はじめに
二　詩と文
(i)　杜牧の自己評價
(ii)　後世の評價
三　「豪」と「艶」
(i)　杜牧の自己評價
(ii)　後世の評價
四　むすび

一　はじめに

「……向者偶見太學生十數輩、揚眉抵掌、讀一卷文書。就而觀之、乃進士杜牧「阿房宮賦」。若其人、眞王佐才也。侍郎官重、必恐未暇披覽」。于是出卷、搢笏朗宣一遍。郾大奇之。武陵曰、「請侍郎與狀頭」。郾曰、「已有人」。曰、「不得已、卽第五人」。郾未遑對。武陵曰、「不爾、卽請此賦」。郾應聲曰、「敬依所敎」。旣卽席白諸公曰、「適吳太學以第五人見惠」。或曰、「爲誰」。曰、「杜牧」。衆中有以牧不拘細行閒之者。郾曰、「已許吳君矣。牧雖屠沽、不能易也」。

（五代・王定保『唐摭言』卷六）

「……さきごろ、偶々太學生十數人が眉を上げたり手を打ったりして一卷の文書を讀んでいるのを見かけました。すぐにその文書を見てみますと、進士杜牧の「阿房宮賦」でした。そのひとは、眞に帝王を助ける才を持っ

た人です。侍郎さまは官位が重くていらっしゃいますので、きっと今までご覧になる時間がないと思いまして」そこでその文書を差し出すと、笏をさしはさみ、一度朗讀した。郾は絶贊した。武陵が「侍郎さま、状元を彼にお與えください」というと、郾は「すでに狀元は選出した」と言った。武陵が「それなら仕方有りません。では第五位を」といい、郾が返答しないでいると、武陵は「そうしていただけなければ、この賦をお返し下さい」と言った。郾はすぐに「仰せの通りにします」と言って、席に着いてから諸公に「さきほど偶然、吳太學が第五位の人物をご推薦下さった」と言った。「誰ですか」という人がいたので、「杜牧という人だ」と答えた。杜牧に勝手なふるまいが多いと非難する人も中にはいたが、郾は「もうすでに吳君にはその旨傳えてある。杜牧に卑賤な所があっても、變更は出來ない」と言った。

ここに引いた文は、杜牧が科學に應じた際の逸話として名高い。[1] これが事實であるのか否かを筆者は詳らかにしない。しかし、著者の王定保は杜牧の死から十八年後に生まれた人物であり、杜牧とほぼ同時代の人であるから、ここに書かれた記事の內容は、概ね事實に沿ったものであろうと考えられる。[2] そしてこの記事から、次の點が看取できる。

①詩人として名高い杜牧の出世作が、詩ではなく、賦であったこと。

②狀元にふさわしい王佐の才を持った人であるという評價がある一方で、進士としてふさわしくないふるまいがあったこと。

杜牧の文學と生涯を考えるとき、この二點は大變興味深い。第一の點に關しては、現在の評價としては、韓愈や柳宗元とは異なり、散文や賦の作家としての評價は詩人としての評價には必ずしも及んでいないからである。また、第二の點に關していえば、この一見矛盾するように見える二つの人物像は、そのまま詩風にも反映されて、杜牧という一人の詩人の中に豪放的な詩と艶冶な詩とが併存しているからである。

本稿は、この二つの問題を採り上げる。最初の手續きとして、自分の詩と文に對して杜牧はどういう評價を下していたのか、また、豪放的な詩と艶冶な詩を杜牧自身はどう評價していたか、を考察する。そして次に、この二點に對する杜牧

の自己評價と後世の評價とはどのように違うのか、及び、その相違の由來する原因は何か、を探ることにする。

二　詩と文

(i)　杜牧の自己評價

杜牧の作品中に、自分の文學について具體的に語った部分が少なくない。以下、それに該當する部分を掲げる。まず、詩にのみ言及したものから採り上げる。

某苦心爲詩、本求高絶、不務奇麗、不涉習俗、不今不古、處於中閒。[3]

（卷十六「獻詩啓」制作年不詳）[4]

私は苦心して詩を綴り、もとより優れた作品を作ることを求めております。その際、奇麗な表現にこらず、世の習慣に染まらず、今風でも古風でもなく、その中閒におります。

次の詩では、李白と杜甫を併稱して贊美している。

命代風騷將　命代　風騷の將
誰登李杜壇　誰か李杜の壇に登る
少陵鯨海動　少陵　鯨海動き
翰苑鶴天寒　翰苑　鶴天寒し
今日訪君還有意　今日　君を訪ふは　還た意有り
二條氷雪獨來看　二條の氷雪　獨り來たり看る

（卷二「雪晴訪趙嵯街西所居三韻」制作年不詳）

ここに、李白と杜甫の雄大で屹立した文學への推崇を讀みとれよう。

次の詩では、詩と文の兩方に言及している。

…
經書括根本　經書　根本を括し
史書閱興亡　史書　興亡を閱す
高摘屈宋艶　高く　屈宋の艶を摘し
濃薰班馬香　濃く　班馬の香に薰ぜよ
李杜泛浩浩　李杜　浩浩に泛び
韓柳摩蒼蒼　韓柳　蒼蒼に摩す
…

（卷一「冬至日、寄小姪阿宜詩」八四二年作）

甥に向かって語り聞かせた詩であるだけに、そこに遠慮や建前はほとんど入らないであろうから、ここで語られた杜牧の文學觀は、その胸臆からでたものと考えてよいだろう。

ここでまず注目しておきたいのは、司馬遷・班固の名を擧げていることである。それぞれ『史記』『漢書』の著者として名高いが、文學史上の位置では、二人とも、韓愈・柳宗元によって推進された古文復興運動の模範の對象となった文人である。その二人の名を擧げて、その文學に近づくことを進めている以上、杜牧自身も、韓愈・柳宗元らによる古文復興運動に贊同していたことは閒違いないであろう。*「韓柳摩蒼蒼」という句にも、韓愈や柳宗元への敬慕の念を窺える。

＊ 筆者は以前、杜牧と韓愈と李商隱の書簡文について、考察したことがあった。（第四十六回日本中國文學會における口頭發表「書簡文における杜牧の文體――李商隱との比較を中心に――」）。そこでは、極めて高い對句率を持つ李商隱の文とは異なり、杜牧の文は比較的低い對句率を持ち、その値は、韓愈に近いことを指摘した。韓愈は過度な修辭を排し、內容中心の古文を實踐した文人である。杜牧の實作品に照らしても、その散文のスタイルは韓愈に近い古文であったのである。

詩については、「李杜泛浩浩」の句に見られるように、李白・杜甫に敬意を抱いていたようである。スケールの大きい詩を詠じたこの二人の名を擧げ、主として生活の樣々な出來事を詠んだ白居易のような詩人の名を擧げていない點は、注意してよいであろう。「泛浩浩」や「摩蒼蒼」という表現にも、小さな世界に終わらず、雄大な文學世界を打ち立てることを望む杜牧の文學觀を看取できる。

杜牧が杜甫や韓愈に尊崇の念を抱いていたことは、次の詩にも明白である。

杜詩韓集愁來讀　杜詩　韓集　愁ひ來たりて讀む
似倩麻姑癢處搔　麻姑を倩（やと）ひて癢處を搔くに似たり
天外鳳凰誰得髓　天外の鳳凰　誰か髓を得たる
無人解合續弦膠　人の解く續弦膠を合する無し

（卷二「讀韓杜集」制作年不詳）

杜甫も韓愈も、一般には、北宋期になってはじめて眞に評價された、と言われるが、その二人を晚唐期にあって早くも評價していることは、注目してよい。杜牧には、文學を見拔く慧眼があったといってよいだろう。(5)

散文作品の中には、杜牧自身の文學觀がより具體的に記されている。次の作品は、杜牧の散文觀を知る上で、重要な資料である。(6)

凡爲文以意爲主、氣爲輔、以辭彩章句爲之兵衞、未有主强盛而輔不飄逸者、兵衞不華赫而莊整者。四者高下圓折、步驟隨主所指。如鳥隨鳳、魚隨龍、師衆隨湯・武、騰天潛泉、橫裂天下、無不如意。苟意不先立、止以文彩辭句、繞前捧後、是言愈多而理愈亂、如入闤闠、紛紛然莫知其誰、暮散而已。是以意全勝者、辭愈樸而文愈高、意不勝者、辭愈華而文愈鄙。是意能遣辭、辭不能成意。大抵爲文之旨如此。

（卷十三「答莊充書」制作年不詳）

文章を書くには、思念を主體とし、才氣をその補佐とし、言辭と構成をその兵器や衞士とするのである。主體が旺盛であるのに補佐が伸びやかでなく、兵器や衞士が華麗かつ莊重でないものはない。四者が自由に驅使され、文章の流れは主體の指示に從う。それはあたかも、鳥が鳳に隨い、魚が龍に隨い、軍隊が湯王や武王に隨って天に昇ったり、泉下に潛ったりして、四方を縱橫に驅けめぐって、すべてが思いのまま、というようなものである。もし思念が先に立たず、單に言辭と構成で終始取り繕っていれば、言葉は多くなる一方で筋道はますます亂れ、それはまるで街路に入り込むようなものであり、紛々として作者がどんな人物か分からず、途方に暮れるだけである。こういうわけだから、思念が完全に勝れている場合には、言辭はますます質朴となり、文章はますます優れるのであり、思念が勝らなければ、言辭はますます華美となり、文章はますます野卑なものとなるのである。これは、思念が言辭を操るのであって、言辭が思念を形成するのではないからである。およそこれが、文章を書く際の要旨である。

華美な「言辭」に反對し、むしろ、そこで述べようとする思念に重きを置くこの杜牧の散文觀は、基本的に韓愈らの古文と一致しており、杜牧が古文作家であったことがここでもわかる。

以上のことから、杜牧は、詩と散文の兩方の分野で、優れた作品を書こうと望んでいたことが確認される。(7)

次に、詩と文についての後世の評價を考えよう。

(ii) 後世の評價

杜牧の詩については、後世の文人から高い評價が與えられているが、では、後世の人々は、杜牧の文については、どのように見ているであろうか。もちろん、散文に對する評價は低くない。たとえば、以下の評を擧げられよう。

詩文並可獨到、則昌黎而外、惟杜牧之一人。

(清・洪亮吉『北江詩話』卷六)

詩文がともに優れた境地にまで到達できたのは、韓愈を除けば、杜牧だけであろう。

……此等議論、唐中葉以後、人所罕知。樊川文章風概、卓絶一代、其學問識力、亦復如是。予向推爲晚唐第一人、非虛誣也。

(清・李慈銘『越縵堂讀書記』卷八)

……このような(杜牧の)議論は、唐中葉以降はほとんど誰も到達していない。杜牧の文章の境地は、一代に卓絶し、その學問や見識も同樣である。私は、杜牧を晚唐第一の文人と稱えたい、本心からそう思う。

牧於文章具有本末、宜其睥睨長慶體矣。

(『四庫全書總目提要』卷一五一)

杜牧は文章にしっかりした據り所があって、元稹や白居易らを見下すだけのことはある。

しかしながら、一般には、杜牧の散文に對する評價は、それほど高くない。卓越した散文家の代表である唐宋八大家に入れられていないし、優れた散文を集めた『古文眞寶』や『文章規範』には、どちらも「阿房宮賦」しか收められていない。また、中國散文史について書かれた記述の中に、杜牧に關するコメントは、ほとんど見出せない。後世の評價は、やはり、詩に集中している。杜牧と言えば、まず第一に、詩人であるとみなされることが多いのである。中國詩史について書かれた文章中の杜牧に關わる記述や、種々の詞華集に收められた杜牧の諸作品を考えれば、そのことは容易に納得で

きよう。

では、杜牧自身、散文に對して見識を持ち、自負もあったにも拘わらず、散文の評價が詩に劣るのはなぜであろうか。次の諸點が、理由として擧げられよう。

①唐以降、文學の中心は詩にあったので、散文に際立った特色を持たない限り、第一義的に散文家として評價されることは少ない。

②韓愈や柳宗元には、それぞれ「師說」や「捕蛇者說」など愛唱される作品が多いが、杜牧には著名な作品に乏しい。

③韓愈や柳宗元の作品は特定の題材に偏っていないが、杜牧の散文は主として軍事論に偏っており、作品の幅が狹かった。

④韓愈や柳宗元の古文復興運動の後を受けて、杜牧は新たな展開を生み出せず、韓愈らを乘り越えることが出來なかった。

⑤風流詩人としてのイメージが强く、散文作家としての印象が薄れた。

以上の一連の理由によって、杜牧は文章での高い評價を得ることが出來なかった。もっぱら詩の分野での評價が高かったという點で、杜牧の自己評價と後世の杜牧評價は大きく乖離しているといえよう。兩立を望んだ詩・文は、詩の方により大きな評價が集まり、韓愈や柳宗元が受けたのと同じ、詩と文の兩方での評價を受けることはできなかった。文では所期の榮譽を得ることは出來なかったのである。

三　「豪」と「艶」

(i)　杜牧の自己評價

杜牧という詩人には、一見、二重人格のように見える部分があって、一方では豪放と評しうる詩を詠ずるが、その一方では艶冶な詩も數多く殘している。本章では、この問題について考えてみたい。

杜牧が自分の詩風について直接言及した部分は、前章で引用したものがすべてである。そこには、雄大な詩風の李白や杜甫への敬慕が見られることは、すでに述べた。その敬慕は、概ねは杜牧の詩風の中の「豪」なる詩の面に相當している、と言ってよい。では、杜牧の詩風の一面を占める「艶」なる詩について、杜牧はどのような發言をしているであろう

か。『樊川文集』を調査すると、直接的にも間接的にも、杜牧は、「艶」なる詩に關しては、冷淡な態度をとっていることが確認される。たとえば、先に擧げた、

某苦心爲詩、本求高絶、不務奇麗、不涉習俗、不今不古、處於中閒。

（卷十六「獻詩啓」）

に見られるように、「奇麗」[8]や「習俗」から離れた作品を目指した、とする。もっとも、「獻詩啓」という題から判斷して、この時、杜牧が獻呈した詩篇は典雅なものばかりだったはずだから、このような發言が出るのは當然のことである。現存する作品から判斷して、杜牧が實際に「不務奇麗、不涉習俗」を貫いて詩作を行なったとは考えられないが、公的な場においては「奇麗」や「習俗」に屬する詩を自己の詩業を代表するものとは考えなかったことは、閒違いない。

間接的ながら、杜牧の詩論を知る手がかりとなるものがある。

所著文數百篇、外于仁義、一不關筆。嘗曰、「詩者可以歌、可以流於竹、鼓於絲。婦人小兒、皆欲諷誦。國俗薄厚、扇之於詩、如風之疾速。嘗痛自元和已來有元・白詩者、纖艶不逞、非莊士雅人、多爲其所破壞。流於民閒、疏于屏壁。子父女母、交口敎授。淫言媟語、冬寒夏熱、入人肌骨、不可除去。吾無位、不得用法以治之。」

（卷九「唐故平盧軍節度巡官隴西李府君墓誌銘」八三七年頃）[9]

（李戡の）書いた文章は、數百篇にのぼり、仁義以外のことは全く記していない。かつて彼はこう言ったことがある。

「詩というものは、歌うことができ、笛にのせることができ、弦樂器で奏でることができるから、婦人や子供はみな、歌おうとする。國家のことでも世閒のことでもなんでも、詩に書きつけたなら、風のように早く傳わってしまう。常々嘆かわしく思っていたことだが、元和年閒以來、元白詩體というものが現われ、あだっぽくてだらしなく、雅人でなければその詩風にダメにされてしまう。その詩は民閒に流れ、屏や壁に書きつけられ、子も親も交々敎えあい、猥雜な言葉は冬の寒さや夏の暑さの

様に、肌骨に入り込み、取り除くことが出來ない。私はしかるべき官職がないので、法を用いてこの弊害を防ぐことが出來ない。」

ここで述べられた元稹・白居易批判は、李戡の發言であり、杜牧の口から直接でた譯ではないが、杜牧自身、共感できる部分があったから引用したはずであり、また、そのように考えられてきた。(10)

以上のように、直接的にも間接的にも、典雅でない、傳統的な詩風からはずれた作品に對しては、冷淡な態度をとっているように見えるのである。(11) ところが、杜牧には、實際には、「艶」と評しうる作品が少なくないし、それが杜牧の詩風のかなりの部分をしめているのである。この問題に關して、様々な解釋が試みられてきた。この點について、次の項で考えたい。

(ii) 後世の評價

杜牧の前述の自己評價を好意的に解釋し、次のように述べる立場もある。

然而、杜牧自己也喜歡狎妓、並寫了若干有關狎妓的詩篇。……如果細加考察、杜牧和元・白涉艶情之詩、在表現上實有區別。杜牧的艶情詩（均爲短律）、大抵寫得簡括含蓄、沒有色情猥褻的成份。元・白詩中則夾雜一些較露骨的肉感描寫。……元・白詩表現男女之情、不但內容較多露骨描寫、而且文詞通俗、其體格實接受當時傳奇小說和講唱文學變文等的影響、而趨向俚俗化。這和杜牧詩的表現簡括含蓄者是頗相徑庭的。

（王運熙・楊明『隋唐五代文學批評史』六二五～六二六頁）

しかしながら、この問題に關しては、杜牧の發言と實作との齟齬を指摘する聲の方が多い。

杜牧之云、「多情却是(ママ)總無情、惟覺尊(ママ)前笑不成。」意非不佳、然而詞意淺露、略無餘蘊。元白張籍、其病正在此、只知道得人心中事、而不知道盡則又淺露也。

（宋・張戒『歳寒堂詩話』上）

杜牧の詩に言う、「多情は却って是れ　總て無情、惟

だ覺ゆ　尊前笑い成らざるを」。詩意は惡くないのだが、言葉が淺薄・露骨でほとんど餘情というものがない。元稹・白居易・張籍も、その缺點がまさしくここにある。人の心の中を言うことは知っているが、言い盡くしてしまったら淺薄で露骨となることは知っていない。

牧風情不淺、如《杜秋娘》《張好好》諸篇、青樓薄倖之句、街吏平安之報、未知去元・白幾何？　以燕伐燕、元・白豈肯心服？

（宋・劉克莊『後村詩話』卷四）

杜牧の詩には艶情が少なくなく、例えば「杜秋娘」「張好好」の諸篇、青樓薄倖の句、街吏平安の報は、元稹や白居易とどれほど異なるというのだ。燕をもって燕を擊つようなもので、元稹や白居易は杜牧の批判に納得できようか。

杜牧嘗譏元白云、「淫詞媟語、入人肌膚、吾恨不在位、不得以法治之。」而牧之詩淫媟者、與元白等耳、豈所謂睫在眼前猶不見乎？

（明・楊愼『升菴詩話』卷九）

杜牧はかつて元稹や白居易を誹ってこう言った。「淫らで汚れた言葉が人の皮膚の中に入り込んでいるが、私はしかるべき官位に就いていないので、それを法律で取り締まることが出來ないのがたまらなく殘念だ。」だが、杜牧の詩の淫らで汚れた言葉は元稹や白居易と全く等しい。ああ、いわゆる、睫毛は眼前にありながら、それでも見えない、ということか。

平心而論、牧詩治蕩甚於元・白、其風骨則實出元白上。

（『四庫全書總目提要』卷一五一）

客觀的に言えば、杜牧の艶治で遊蕩する面は元稹・白居易よりも甚だしく、その風骨は實に元稹・白居易の上を行っている。

このように、杜牧が元稹や白居易を非難するだけの資格はない、とする意見が數多く見られるのである。實際、杜牧の詩を見る限り、杜牧の詩風の一面を「艶」と表現しうること

は、十分に理解出來ることである。

では、「艶」と評しうる詩が杜牧に系統的に見られるのに對し、杜牧自身の發言では、この「艶」詩が閑却されているのはなぜだろうか。この問題については、以下の理由を擧げられるだろう。

①自己の文學の中心を、儒家的知識人の傳統的文學理念として、より正統的な「豪」詩に置き、「艶」詩はいわば餘技として、低く見ていた。

②望んだ官職を手に入れられなかった杜牧にとって、遊蕩の所産である「艶」詩には積極的な評價を下しにくかった。

そして杜牧自身の評價にも拘わらず、後世では、「艶」詩にも評價が集まった理由として、次の諸點が考えられよう。

①「豪」詩は晩唐以外の時代にも存在していたので、それだけでは個性を發揮しにくい。

②晩唐の詩風に「艶」詩が適合し、一層强調された。

③風流詩人のイメージが强烈であったので、「艶」詩により目が注がれた。

歴史的に通觀すれば、詩人――より廣くは作者――本人が望んだ評價とは異なった方面で評價されることがしばしばある。杜牧の詩は、その典型と言えるかも知れない。「豪」の面での評價を望んだ杜牧の詩は、單に「豪」のみならず、積極的な評價を望まなかった「艶」詩にも高い評價が寄せられている。現在、愛唱されている杜牧の作品の詩風から考えると、後世の評價は、むしろ「艶」詩の方により集まっている、と言ってもいいかも知れない。本人にとって、恐らく豫想外の榮譽を受けることになったわけである。

詩人の個性を決めるのは詩人本人だけではなく、後世の讀者もそこに大きく與っていると言うべきであろう。

四　むすび

數ある詩人の中で、一見矛盾する二つの詩風の作品を殘し、それぞれがその詩人の詩風を代表するほどに優れた作品となったケースは、それほど多くはない。特に、士大夫としての「豪」と風流詩人としての「艶」はイメージが大きく離れているため、古來、兩立が困難であったようである。杜牧

の場合は、その稀なケースの一人と言うべきであろう。だが、杜牧の詩業を見ると、この二つの詩風が互いに阻害しあったようには見えない。むしろそれぞれが一層個性的に見えて、互いに好影響を與えているように見えるのである。それは何故だろうか。本稿のまとめとして、杜牧がこの二つの詩風の作品をどのように考えて詠んでいたか、をその實態として考察しておきたい。

名門の家柄に生まれた杜牧は、經世濟民の素志が強かった。その思いは詩文の端々に現われている。その彼が「豪」詩を詠じ、その詩によって名をあげたいと考えたことは當然であろう。しかしながら、唐代傳奇小説などの文獻に見られるとおり、唐代の士大夫の多くはしばしば色街に出入りし、妓女との交遊も重ねていたようである。杜牧の多くのエピソードに見られるように、杜牧自身も類似する經驗があった。他の詩人と杜牧が異なるのは、そこでの交遊とそれにまつわる心情を、抑制することなく、積極的に詠じていることである。

杜牧は、實際には、「艶」詩を詠ずることによって感情の自由な發露を得、性情を吐露するものとしての喜びと安らぎを感じていたのではないだろうか。しかし、「艶」が單に「艶」として提出された時、儒家的詩人社會で高い評價を得ることは困難である。彼は、「豪」と評しうる詩文を積極的に詠むことによって自己の「艶」なる社會を防衛した、と言ってよいだろう。また、「豪」たる詩文に力を注ぎ、優れた作品を書くことによって、その文學活動に餘裕が生まれ、存分に「艶」詩を詠む環境を得ることができたとも考えられよう。そして、二つの詩風の詩を詠ずることによって、雙方の個性をより明確に把握し、それぞれの詩を一層効果的に詠ずることができたはずである。より正確に言えば、「豪」をうちに含むことによって、杜牧の「艶」は獨自の「艶」となり、逆にまた「艶」をうちに含むことによって、杜牧の「豪」は獨自の「豪」となったのである。杜牧がどこまで意識的にこの二つの詩風の詩を詠じたかは檢討を要するが、少なくとも、「豪」と「艶」が杜牧文學の中に、さらには同一作品の中に併存することによって、それぞれがより個性的な成果を生みだし得たことは、疑いを容れない。「豪」だけでも杜牧の文學は成立しないし、「艶」だけでも成立しがたい。この二つがそろうことによって、杜牧の文學は、眞に魅力あるものとなったのではないだろうか。

〔注〕

(1) 同様な記事が、『唐才子傳』の杜牧の條にも見える。

(2) 『中國大書典』(中國書店、一九九四年)には、次のように見える。(二九一頁)

《唐摭言》所載內容較爲可靠。雖王定保自稱此書是他諮訪前達及與同年談論內容的筆記。但實際上從各篇所錄內容分析、其中絕大多數是採用當時尙存的國史・實錄等官方文獻、以及同時或前代士人的詩集與各種稗史札錄等文獻、加之他勤于聞問討教、著成此書。因此、《唐摭言》書中所載內容頗爲可靠、可以作爲研究・考證歷史的依據、增强了此書的史料價値。

(3) 「不古」が具體的にいかなることを指すのかは不明だが、七言律詩の韻律リズムに新機軸を打ち出そうとしていた、という指摘がすでになされている。參照：松尾幸忠「杜牧七言律詩の特色」(早稻田大學中國文學會『中國文學研究』十三期、一九八七年)

(4) 制作年代は、特に注記しない限り、繆鉞『杜牧年譜』(人民文學出版社、一九八〇年)に依據する。

(5) 荒井健『杜牧』(筑摩書房、中國詩文選十八、一九七四年、九七頁)に、李白と杜甫の詩、韓愈と柳宗元の文、の四者の組み合わせを中國文學の古典として最初に位置づけたのは杜牧である(要旨)、と述べている。

(6) この文は、杜牧の散文觀を述べたものとして注目されている。

また、王運熙・楊明『隋唐五代文學批評史』(上海古籍出版社、一九九四年)では、杜牧のこの文學觀の系譜を指摘し、以下のように述べる。(六一九～六二〇頁)

作文當以情意爲主、是中國古代文論中的一個傳統命題、有着悠久的歷史。陸機《文賦》曰：「理扶質以立幹、文垂條而結繁。」摯虞《文章流別論》曰：「古詩之賦、以情義爲主、以事類爲佐。」范曄《獄中與諸甥姪書》曰：「常謂情志所託、故當以意爲主、以文傳意。」《文心雕龍・情采》曰：「故情者文之經、辭者理之緯。經正而後緯成、理定而後辭暢、此立文之本源也。」杜牧承襲了這一命題、祇是表述得更爲具體。杜牧論文又重視氣、提出「氣爲輔」之說。曹丕《典論・論文》曾謂「文以氣爲主」、其所謂氣、指作者的氣質・個性。杜牧所謂氣、則指作者臨文時的精神狀態和文章的氣勢、氣脈。唐代古文重振以後、文家論文比較重視文氣、梁肅有「失道則博之以氣」(《補闕李君前集序》)之語、韓愈有「氣盛言宜」之論(見《答李翊書》)。杜牧散文注意學先秦兩漢之文、屬古文一派、又推崇韓愈(詳下)；其「氣爲輔」之說、大約受到前輩古文家的啓發。同時李德裕有《文章論》、亦重文氣、認爲「鼓氣以勢壯爲美」、可謂同聲相應。

(7) ただし、「艷」詩が、杜牧の人生の總ての時期にわたって詠まれたわけではないことは、多くの論者がすでに指摘して

いる。参照：松尾幸忠「黄州時代の杜牧――「艶」なるものの内在化――」（早稲田大學中國文學會『中國文學研究』十五期、一九八九年）。松尾論文の、黄州刺史時代を境に、「艶」詩が作品の中から消え、「艶」の要素が後半生の抒情的な詩の中に潜在的に受け継がれている（要旨）、という指摘は、傾聴に値する。

（8）たとえば、繆鉞『樊川詩集注』前言（上海古籍出版社、一九八二年、七頁）や注（6）所掲の王運熙・楊明『隋唐五代文學批評史』（六二〇頁）では、「奇麗」は李賀を、「習俗」は白居易・元稹らを指す、とする。

（9）愛甲弘志「杜牧の詩と散文――その両者を支える創作基盤――」（九州大學文學部『文學研究』八十輯、一九八三年、一六八頁）による。

（10）たとえば、注（6）所掲の王運熙・楊明『隋唐五代文學批評史』の六二五頁には、以下のように述べる。

杜牧《李府君墓誌銘》一文、用欽佩・肯定的語氣來介紹李戡；故可以認爲、李戡痛斥元・白的這段話、杜牧在一定程度上也是同意的。

（11）杜牧が編集に關與した文集の本集に「艶」詩が少なく、後世の人によって補われた「別集」「外集」に「艶」詩が集中している、という指摘がしばしばなされている。狀況證據ながら、杜牧が「艶」詩を第一義的に自己の文學を代表するものとは考えていなかった、ということが、このことから知られよう。参照：注（9）所掲愛甲論文、一六九～一七〇頁。

（12）松川溪南『美的生活の權化』（東雲堂書店、一九〇七年、一三八～一三九頁）に、「既にかくの如く、其生涯を通じて、たゞ悲慘と痛心と憂苦と不平と、を以て弊はれたりしを知らば、さらずとも快樂主義を抱ける彼が、詩と、酒と、色とに、其慰樂を求めむとせしことの、彼にありては亦必ずしも深く異しむべきにあらざるをしるらむ。」と述べる。「附考」参照。

【附考】 最初の杜牧の傳記

注（12）で引用した松山溪南の『美的生活の權化』という書は、恐らく最も早い杜牧の傳記の書である。杜牧の傳記は、中國では繆鉞の『杜牧年譜』（人民文學出版社、一九八〇年）が專著としては最も早く、日本では倉石武四郎の「杜牧年譜」（『支那學』第三卷十一號、一九二五年）が論文として最も早く公刊された、と思われてきた。しかし、そのいずれよりも早く、日本において、書籍という形をとって出版されたのが、松川溪南の『美的生活の權化』である。『美的生活の權化』というやや衒った書名を持ち、副題をつけていないためか、杜牧研究者の閲でも存在すら知られていなかったようである。奥附によれば、著者は松川奇、發行所は東雲堂書店、發行年は明治四十年三月廿五日、定價金五十錢とある。本文卷首では、著者名を松川溪南とする。「奇」が本名で、「溪南」が號か。この松川溪南については未詳。ただし、凡例の四で、「此書嘗て故野口寧齋氏及早稲田大學講師牧野謙次郎氏等

の一閲を請へり、併せて錄して謝意を表す。」とあるので、ここから何か分かるかも知れない。自序と凡例を附し、本文は二二六頁。内容は、時代概説のあと、「少時」「壯時」「晩年」「人物」「麗情」「文」「詩」「其弟」「詞友」の順に、杜牧の傳記と人物、文學、環境などを述べている。極めて初期の論考であり、類書が少なかったことなどから、現在の杜牧研究の水準から見れば、とるべき所に乏しいが、いくらかの個性も感じうる。

【附記】
本稿は、一九九六年度文部省科學研究費補助金（特別研究員奬勵費）による研究成果の一部である。